アーティストインタビュー
絵永けいさん（演劇ユニット石川組）

—幼少期から今に至るまでのお話を伺えますか

絵永：出身は仙台です、生まれも育ちもずっと仙台で。仙台から離れたことはないです。で、子どもの頃ですか？　子どもの頃。どうだったか。なんか物心ついた頃っていうか、小学校の高学年ぐらいの時に、演劇部っていうのはなかったんですけど放送部っていうのができて。それでなんかちょっとセリフをしゃべってみたいなっていう、単純にそういう思いがあって。それで放送部には入りました。

—演劇を始めたのはいつだったんですか？

絵永：それでそのまま、中学校に上がって、それで演劇部に入ってっていう感じですかね。一番最初に舞台に立ったのが、『森は生きている』っていうお芝居で。私は 1 月から 12 月までいるんですけど、それのたしか 11 月の役だったと思うんですけど。おじいちゃんっていうか、中年の男の人の役でした。高校に上がって、1 年生の時は演劇部に入ったんですが、そのあとなんか、面白くなかったのかな、んーと思って、1 年で辞めましたかね。

—辞めてからはどんなことをしていましたか？

絵永：なんか記憶ないんですよね。芝居をやってたっていう。だからやってなかったと思います（笑）。やってなかったと思うんですよね。

—何をやってた記憶は、なんかありますか？

絵永：いや、ほとんどないです。ないですね。なんか。つまらない、つまらない人生を（笑）。

—いえいえ。大学に進学されてからはどんなことを？

絵永：はたちの時だったと思うんですけど、そこでなんか石川と出会ったんですけど。その出会ったその風景を今思い出せない（笑）。どこでどうやって出会ったんだっけって今考えてるんですけど。何か観に行ったんだったかな？　で、たまたまそこに、いたのかな。
彼はね、もう中学校からばりばり演劇人で。自分で書いて自分でやってみたいな感じだったみたいです。劇団にちょっと入りませんかみたいな感じではなくて。なんか一緒にちょっとやってみる？　みたいな感じだったと思うんですけど。

—そこから、どのような20代・30代を送ってましたか？

絵永：一番大きいのはやっぱり、石川と一緒に芝居をやり始めて。しばらくの間付き合ってて。それで、30代前半の時に一緒になったんです。籍を入れて。で、そうですね。なんかやっぱり、芝居浸けの人生っていうか、ずっと本当に芝居をまず生活のメインに置いてっていうような生活をしてきましたね。なので、収入はアルバイトをしながら、微々たる収入を得ながら、芝居を中心に生きてきたっていう感じですね。なんかそれ以外は何もないです（笑）。

—テント芝居で旅公演とかしてたのは40代ぐらい？

絵永：いや、もっと若い。30代ぐらいから。34だから、30代の後半ぐらいからだったかな。何年ぐらいやってたかな。5、6年？　もっとやってたかな。ただやっぱり、テント芝居は本当に体力勝負なので、若いうちじゃないとできないので。ギュウさんとか太郎さんとかもうばりばりのまだ、はたちぐらいの、一番、一番フレッシュで元気な時で。彼らとも一緒にテントでいろんなとこ回ってっていう生活をずっとやってました。
まずふつうの生活してたら経験できないような、本当にある意味、ものすごく大事で貴重な時間だったなって思いますけど。ずーっと、もうずーっと一緒なわけですよ。もう、寝食共に、本当に寝食共だから。時々ちょっとね、なんか軋轢というか、息苦しさも時々あるんですけどね。だって、本当に、1回テント立てたらそこで寝てご飯食べてそこでお芝居やってなので。ちょっとね。

—なんか、テント芝居を石川さんがすごいこだわってたっていうのは何かがあ

ったのかっていうのは？

絵永：私自身もそうですけど、もちろん小さい頃からお芝居っていうとやっぱり劇場で舞台があって客席があって観るみたいな感じだったんですけど。でも、私高校生だったんですけど、一番最初に観たのが唐十郎の紅テントで。西公園で。もうそれにもうカルチャーショックで、本当に。なんかね、もうなんか、うわーみたいな感じだったんですよ。それでもう、麿赤兒さんとか、あと四谷シモンさんとか、もう往年の、あと根津甚八さんとか、もう亡くなりましたけどね。もうばりばりの頃で。それでもう、すっごい、本当カルチャーショックで。で、石川もそうだったと思うんですね。

—劇場には無い熱気がすごかったと聞くんですが、お客さんは今と比べていかがですか。

絵永：熱量はやっぱりものすごい、やっぱり今と比べたら。ものすごかったですよ。たぶん小屋のせいもあるんだとは思うんですけど、劇場だとどうしても自分のスペースがここで、お隣さんここで、守られててて。こういう感じで観てるみたいな感じだけど。でもやっぱりテントは。一応ね、ありますけど、お客さんのほうも、ものすごく高熱で。高熱。熱を出して、役者と同じぐらい発熱して観ているみたいな感じは強くありましたね。

—活動のモチベーションは演劇で食えるようになりたいっていうことだったのか、それとも演劇を続けていきたいから仕事は続けよう、というマインドだったのか。

絵永：それは後者ですね。なんかそういう考え方自体違ってるのかもしんないですけど、お芝居で飯を食おうとは思ってなかったっていうか、食えねえだろうと思ってたので。で、これはちょっと、どうなんだろうな、みんながみんなそうじゃないかもしれないですけど。なんか、そのほうが、たぶんやりたいお芝居をやれるんじゃないかなっていうか。なんか、収入のことを考えて、作品とかそのあとになってしまうと、本当に 100 パーやりたいことがやれるのかなっていう、いう思いもありましたかね。

—作品を作るにあたって、劇団としてやはり石川裕人の世界を立ち上げる劇団っていうとこではみんな一致してた？

絵永：そうですね。それは間違いない。やっぱりみんな彼の作品が大好きだっていうのが基本で。

—どんなところが、魅力でしたか？

絵永：そうだなあ。なんか一言でまとめられないですけど、よく話をするのは、愛があるんですよ。最後に。なんか、ちょっと、ありふれた言い方ですけど。なんだろう。愛情に溢れているというか。決して突き放した目で書いていない。見てない。どんな作品も最後はやっぱり、なんだろうな、愛ですかね。

—石川裕人さんが亡くなられてからも、石川組として作品の上演は続いていますが、難しさは？

絵永：やっぱり石川の作品は石川が演出して初めてなんか完成するっていうようなところはすごく大きいと思うんですね。ただ、やっぱりいろんなところに触れてますけど、石川裕人が書いた戯曲を知ってもらうっていうことが、まず一番大きく石川組の目的としてあるので。同じ作品でも演出家が変わればやっぱり微妙に色合いも変わってくるので。それは承知の上で、まずは本当に 10 年も経ってしまえば石川を知らない方がどんどん増えていくわけで。そういう中で、やっぱり自分たちが愛してきた作品を 1 人でも多くの方に知っていただきたいっていうのが 1 つ大きな目標では、目的ではあるので。やっぱり、同じ台本やってても、変わってくるんですよね。うん。やる役者も違えば、私なんか随分もう前にやった作品なので。その時々の演者の感覚とかも変わってるし。だから。それはそれでしょうがない、しょうがないっていうとちょっとマイナスな言い方だけど。それはもう当然なことだろうなっていうふうに思うし。逆に、ああこういうふうに演者と演出が変わると、作品、こんなふうに変わるのかって少し楽しめるぐらいの気持ちになれればいいなっていうふうに思うんですけど。

—なぜ絵永さんはそんなに演劇に魅せられて手放さずにずっと演劇と共に生きてきたんでしょうか。

絵永：たまにやっぱり自分でも自分に問いかけるんですよ。なんで芝居やってんの？　なんで芝居やってきたの？　こんなに長きにわたって。だけど、そんな劇的な出来事があって決心して芝居を始めたわけでもなく。なので、私の結論としては、これは血なんだと。この身体に流れている血がそうさせるんだ。っていうふうにしか言えないんですよ。そうなんですよ。誰かに誘われてもないし。ただなんか、ぽつんってやりたいなって思ったのがきっかけなので。